

平田 豊

Hirata Yutaka

ぼくのエイズ宣言

あと少し
生きてみたい

集英社

ぼくのエイズ宣言
あと少し
生きてみたい

平田 豊
Hirata Yutaka

集英社

ぼくのエイズ宣言

あと少し生きてみたい

一九九三年十二月二〇日 第一刷発行

著者 平田 豊

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇〇―一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇―六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇―六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇―六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、本社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

ぼくのエイズ宣言

あと少し生きてみたい

目次

はじめに 5

第一部 エッセイ

第一章 「エイズ」宣告 12

母には黙っていたいよう 12

恐怖からの脱出 17

語り口の暖かい医師 27

モリさんのこと 32

アイ君とタカちゃん 42

故郷の友人たち 50

リビング・センターを設立したい 62

駄目を押す人生 65

会いたいな、K先生に 71

寺山修司さんと前登志夫さん 74

ゲイであること 79

生けることと死すること 83

偏見とエイズ教育 86

エイズをパターン分けするな

91

根本的なこと 96

第二章 生きていく風景

99

つらい話をしなかった父 99

短歌と叫び 103

秋の高原で 110

立冬の日に 117

世界で一番小さな海は？ 121

父の死の情景Ⅱ東京に初雪の降った日にⅡ

125

尺八の音が聞こえる 129

エレキギターの思い出 137

インコの思い出 142

ボランティアの人々 148

あと少し生きてみたい 151

第二部 短歌に託して

我がキルト青空に舞え 156

ポジテイヴ 184

唱歌集 216

初期歌編 222

あとがきにかえて 232

はじめに

平田さんに、はじめて会ったときはよく覚えている。

一九九二年の二月に病院の前で待ちあわせをした。私はエイズをテーマにした漫画を描こうと思って資料を集めていたのだが、外国のものはともかく、その時点では患者・感染者の側から書かれているものがほとんどなかった。医師側から見た例が報告されているだけで、実際に病気になる人たちがどんなふうに生活しているのか、具体的に、肌身にかけて想像することができなかった。一人でいいから患者・感染者に会って「声」を聞きたいと、私は思っていた。友人を通じてたまたま「会ってもいい」という人が現れ、私はいくぶん緊張気味に約束の場所へ向かった。どんなふうに話しかけていいのか、握手したいけど握手するのはわざとらしく受けとられないだろうか、いま思うとバカみたいな懸念だけど、本当にそのときまで、エイズ

は私にとって「顔」を持たない病気だったのである。

遠くから長身の男性がひょうひょうと歩いてきた。退院したばかりで、いまは近くのアパートから通院しているのだという。ひとことめに彼は、

「いまは、どこも悪くないんだよね」

と言った。

彼が同世代だったこと、地方から上京してきてフラフラ好きなように生きてきたこと、オトコを追いかけてたりふられたりの話もなんだか共通項があつて、私は彼にとっても親しみを覚えた。飲み屋でもし会つてたとしたら、意気投合するタイプ。同時に、彼と私の差異が非常に小さく感じられて、どうして彼がエイズにかかつて私がそうでないのか、不思議な気さえた。

彼は何度か家にも遊びにきた。若い友人たちを連れてきたり、突然、思いついて立ち寄ってくれたり、一緒に温泉にも行った。よく飲んだしよく食べた。私は彼がものを食べてるところを見るのが好きだった。病気に負けないよう体力をつけるんだと、一所懸命ガンバってるような食べ方だった。なかなか歯を診てもらえないから虫歯が治らないとボヤきながらも、ポリポリ柿ピーをほおばっていた。

彼ははじめから自分がエイズであることを隠したくないと言っていた。自分のことを語って知ってもらいたい。他の感染者や患者の人たちと励まし合いたい——。私は友人の吉岡忍さんに相談を持ちかけたところ、有志が集まって「エイズを考える会」が結成された。平田さんの活動を支えるような人々に呼びかけると、多くの人たちがそれに応えてくれて、私はこの問題に対する人々の関心の高さを思い知らされた。ほんの少し前まで、患者のプライバシーだの感染経路だのを興味半分で追っていたような世間の風潮に対し、みんながもっとエイズを近くに引き寄せて考えようとしているのだと感じた。

さて素顔の平田さんというと、気まぐれだし、わがままだし、口は悪いし、私はそういう男が嫌いじゃないから波長は合っているのだけど、つきあっていると本当に忙しい。ポコポコと思いついたことを言い散らかしては、周りの者がそれをあわてて拾い集めている感じ。そんなふうに冗談とも本気ともつかないようなことを百言ってるうちに、ポコリとものすごくテンションの高い内容が見え隠れしたりする。周囲がハッと感動するような、きわめて鋭い切り口で状況をとらえていたりする。

一緒に会をやっていくのにたいへんな面もあったけれど、私はそういうチャランポランさが

好きだった。チャランポランな軽口をたたきながらも、彼は不思議な透明感を漂わせていた。澄んだ目をしているなアと、会議の途中でフツと遠くを見てる彼に、気づかされたこともある。彼の歌やエッセイには、彼のいちばん純度の高い部分が結晶されている。

彼はふだん弱音も吐かないし泣きごとも言わない。大真面目に語ることもなければ、何かをふりかざして力説することもない。いつもとぼけた口調で淡々と、陽気に話していたけれど、なるほどこんな風景を見ていたのかと私は胸が熱くなる。彼の文章はふつくとあたたかい。彼が誰にも見せずにしまっていた心のひだに、いまだけ光があたってきらめいているようだ。彼がもうすぐ失明すると知らせてくれたとき、励ましのことばがみつからなくて私は電話口でとまどっていた。たくさん弱音を吐いてもよさそうなのに、彼はいつもと同じような口調で、ひとことポツリと言っただけだ。

「しょうがないよね、コレカラ目が見えないことを楽しまなくちゃ」
どんなふうに返事をしたか、私は覚えていない。

一九九三年一〇月

石坂 啓

ぼくのエイズ宣言

あと少し生きてみたい

装幀／明比朋三
装画／岩田信夫
本文写真／内山英明

第一部 エッセイ

第一章

「エイズ」宣告

母には黙っていよう

大学病院での生活が始まった。主治医の斎藤先生との二人三脚の生活。部屋は面会謝絶の札が貼られた。部屋に入るには入口でマスクを付け、帽子をかぶりそして殺菌してある服を着てその上に、アルコールで手と衣服を消毒してからという非常に念の入ったものであった。今で

は、エイズ患者はここまで隔離されることはないが、二年前はあたり前のようだった。

大学病院に来てから毎日、毎日がとでもつらかった。熱が不定期に出始めると、食欲もなくなり、病院からの三度の食事も、また、遠目で食事の時間になったのかと思うくらいだった。体はみるみるうちに痩せてきて、骨と皮がくっついてしまうのではないかと思った。それでも起き上がることもできなかつたので、自分の顔を鏡で見ることになつた。ある日、一人で病室の中にあるトイレの横にある鏡で自分の顔を見て驚いた。これが自分かと思つた。やつれて、目はくぼみ、ひげづらの男が映っていた。たまにTVでみる難民だとか、餓死している国の人々の映像と、自分自身変わらなかつた。ああ、こうして人は老いていき、死んでいくのだと思つた。

気管支鏡の検査は検査というよりも、手術である。カメラのついた管を肺の中に入れて、その先の部分で肺の肉片を取るといふものだ。どうしても口の中に管をさし込まれるのができなくて、何度も先生を蹴り上げた。前の病院で胃カメラをやっぱり飲んだけれど、その数倍の恐怖感だった。横では体の中に入ったカメラが映像を映している。三回ぐらい先生を蹴つたろうか。「これで終わりですよ」と言われた時、本当に嬉しかった。検査をしてくれた先生も汗で

びつしよりであつた。二度と、こんな検査は嫌だ、こんな辛い思いをするならば死んだ方がいいと思つた。

気管支鏡の検査が終わつてストレッチャーに乗つて、自分の病室に帰る時に見た青空がとても素敵だった。吸われない、溶けたい、そう思うような見事な青色だった。空があることを忘れていた。

真夏の空だった。

もう一度、外に出て空をゆつくりとながめてみたいと思つた。

病室に帰るまでのわずかな時間にいろんな人に声をかけられた。看護婦さん、研修医の先生達、それでも誰なのかわからなかつた。私の病室に入ってくる時は皆マスクをしているので、外で会う時はマスクをはずされているのでわからなかつた。主治医の斎藤先生も、随分あとになつてやっとわかつたくらいだ。

検査の結果、カリニ肺炎でエイズだと告げられた。突然にいっぱい先生達や看護婦さんが入つてきて「検査の結果、あなたは後天性免疫不全症候群だ」と言われた。何となく妙にしんとしていた。